

# Reflection 8

ICIS Newsletter, Kansai University



## Contents

第3回次世代国際学術フォーラム……………	2
東アジア文化研究科の開設 —文化交渉学の新たな研究拠点として—	4
天草フィールドワーク活動報告……………	5
国際シンポジウム「道教研究の新側面」……………	6
創生部会……………	7
コラム／「オランダ水」の謎……………	8
連載コラム／食の文化交渉学 第7回……………	9
活動報告およびお知らせ……………	10
紀要募集要項……………	11

# ICIS

文部科学省グローバルCOEプログラム  
関西大学文化交渉学教育研究拠点

Institute for Cultural Interaction Studies, Kansai University

# 第3回 次世代国際学術フォーラム

## 「文化交渉における画期と創造」

2010年12月11・12日、関西大学文化交渉学教育研究拠点（ICIS）主催の「第3回次世代国際学術フォーラム」が開催された。

本フォーラムは、ICISの若手研究者が中心となって企画・運営をするシンポジウムで、次世代の学界を担う研究者の意見交換、さらには参加者を交えて世代を超えた議論の場にもなりつつある。

過去2回においてもICIS関係者はもちろんのこと、国内外から多数の報告者、および参加者が出席された。今回は、中国・台湾・韓国、そしてオーストラリアやイタリアで積極的な研究活動をされている皆さん、また外国出身ながら日本の大学を活躍の場とされている皆さん、というように「現代における文化交渉」を体現しておられる研究者が中心になって実施されたのが特徴的である。4つのセッションも使用言語が日本語2、中国語1、英語1、となり、まさに国際学術という名にふさわしい内容となった。そして忘れてはならないのは、コメ



セッション2発表者・コメンテーター

ンテーター・通訳の存在である。セッションにはそれぞれその分野の先達である研究者にアドバイスを兼ねたコメントをしていただいた。次世代の研究を切り拓くのは若手研究者だが、先行研究があつての学術である。その点で経験豊富なコメンテーターの意見や批判は、実に頼もしい。加えて、本フォーラムのような国際学術交流では、言語をつなぐ通訳の存在は極めて重要である。通訳なくして議論の展開を望むことはできない。セッション1で金泰勲氏（立命館大学・非常勤講師）、4では豊山亜希氏（日本学術振興会・特別研究員PD）に難しいお仕事を担当していただいた。最初に御礼を申し上げておきたい。

過去2回のキーワードを紐解くと、「文化の再生産」「交渉による変容」が追求されていて、新しい学問領域であ

る文化交渉学の前進に大きく寄与したものだ。その成果を受け継ぎながら、第3回では「文化交渉における画期と創造」という全体テーマを設定した。つまり、文化の接触や他文化を意識する契機となった事柄、そしてその画期をもとに新しい文化が構築される様相に注目したのである。この画期と創造を具体的に明らかにしていくためには、歴史性を重視しなければならない。そこで今回は、「歴史世界と現代社会」という副題を含めて、比較検討を実施するに至った。

2日間にわたる濃密な研究会は、上島紳一関西大学副学長の開会挨拶によって幕を開け、以下のような報告が議論の中心となった。



質疑応答の様子

セッション1「歴史的变化にみる東アジアの経済的諸関係」（使用言語・日本語）は、19世紀後半から20世紀前半にかけて、東アジアがどのように経済的変化を遂げ、それが日本、中国、朝鮮にどのような影響をもたらしたのかを議論した。荒武賢一朗（COE助教）は、経済都市大阪と朝鮮半島の市場的連関性と、国家対国家、あるいは都市対都市の交渉ではなく、都市対国家の構図を示した。伊藤昭弘（佐賀大学・准教授）の報告は、日露戦争後に日本統治下となった遼東半島に多くの日本人が経済的進出を果たし、そのなかで産業技術の伝播や経営の実像を述べた。金允嬉（翰林大学校・HK教授）は、日本の金本位制実施が東アジア全体に与えた影響を考察し、広域的経済ネットワークおよび地域金融ネットワークの分析を進めた。谷本雅之（東京大学・教授）からのコメントでは、このセッションによる新しい研究の視点と、これまでの経済史研究との関係について意見が



出された。

セッション2「周縁日本を取り巻く外交関係」(使用言語・日本語)は、18世紀と19世紀における日本を取り巻く外交史研究を主要なテーマとした。鄭英實(COE-RA)は、18世紀初頭の外交使節「朝鮮通信使」と日本の知識人がどのような思想・認識を持ち合わせていたのかを述べた。一方、明治維新期のイタリアと日本の外交関係を考察したのは、ベルテッリ・ジュリオ・アントニオ(大阪大学・特任教員)である。この報告では、日本ではほとんど紹介されていなかったイタリアに残る公文書を素材とした新しい事例が検討されている。ルー プレンダン(東京学芸大学・博士課程)の成果は、幕末期の日本に訪れたメルメ・カションという宣教師に注目し、その人物史的考察から文化交渉へと論点を飛躍させた。宮地正人(東京大学・名誉教授)の総括では、3報告の成果と課題が述べられ、日本を取り巻く外交史研究の意義が語られた。

2日目には、文化の本質をとらえる魅力的な報告が揃った。セッション3「文化の想像／創造—大衆文化という視点から」(使用言語・中国語)は、大衆文化に注目し、中華圏を主要なフィールドとして白熱した議論が行われた。張文菁(早稲田大学・非常勤講師)は、台湾文学の変遷をたどりながら、貸本屋の役割を具体的に考察した。20世紀における台湾音楽界の特質を論じた劉雅芳(台湾交通大学・博士課程)は、日・米からの影響と「モダニティ」の具現化を明らかにしている。羅小茗(上海大学・助理研究員)は、テレビドラマの内容から現代中国の文化的特質に迫る報告をして、社会風潮や都市の実情を詳しく述べる。濱田麻矢(神戸大学・准教授)の指摘では、各地における「異なった現代性」に

注目した新しい分野の開拓であるとの評価がなされた。

最後のセッション4「文化の拡大—多角度による文化交渉の現場から」(使用言語・英語)は、異文化の衝突、そして新たな創出に関する研究手法を幅広く論じることに努めた。林封良(台湾交通大学・博士課程)は、中国近代化の起点となる五四革命への思想的分析を述べた。天安門事件をきっかけに亡命詩人となったヤン・リエンに注目したメロラ・サブリナ(ナポリ大学・非常勤講師)は、思想と詩作の両面について特徴を探った。オーストラリアのマイノリティを分析する濱野健(西シドニー大学・博士課程)は、日本人女性の婚姻移住をテーマとして状況報告を展開させた。自身が文化交渉を日々実践しているコメンテーターのジェレヴィーニ・アレッサンドロ・ジョバンニ(早稲田大学・准教授)は、研究者、翻訳者としての立場から、文化交渉の受容と拒絶の論点を提示した。

全体を振り返って、個別報告の持つ重要な提起と、緻密な資料分析が文化交渉学を発展させる原動力になっていることを痛感する。また、個人が主張する上質な研究を、学界で共有させる場としての本フォーラムの意義は揺るぎないものと改めて認識した。

以上、当日の状況を簡単に整理したが、もちろんこの短文で十分に伝えることはできない。2日間の実りある成果は、荒武賢一朗・池田智恵編『文化交渉における画期と創造—歴史世界と現代を通じて考える—』(2011年3月刊)に記載されているので、ぜひ手にとっていただきたい。

※文中の所属はフォーラム当時。

荒武賢一朗 (COE助教)



関係者記念撮影

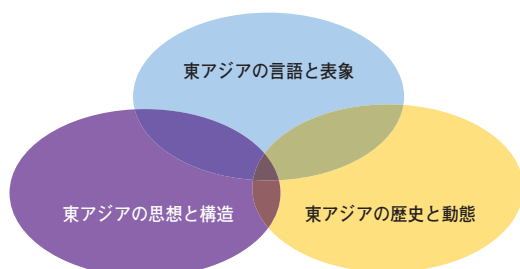
# 東アジア文化研究科の開設 —文化交渉学の新たな研究拠点として—

藤田高夫（文化交渉学教育研究拠点サブリーダー・東アジア文化研究科副研究科長）

関西大学は、2011年4月に新しい研究科として東アジア文化研究科を開設いたしました。この新研究科は、現在最終年度を迎えているグローバルCOEプログラム「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成」が2012年3月に終了することを踏まえ、そこで形成した教育組織の継続とさらなる発展をめざして開設されたものです。

グローバルCOEプログラムの人材育成組織として、関西大学ではすでに2008年4月に文学研究科を改組し、文化交渉学専攻を設置しておりました。この専攻が2010年3月に完成年次を迎え、最初の課程博士が輩出されることをうけて、同専攻を文学研究科から独立させ、新たに開設する東アジア文化研究科のもとに移すことといたしました。これによって関西大学の特色ある東アジア文化の教育研究活動を一層充実させるとともに、グローバルCOEプログラムで培われた国際的教育研究ハブとしてのさらなる展開をはかります。

カリキュラムについては、基本的に文学研究科時代のそれを継承しますが、新たに東アジア文化を研究するための基本的視角として、「東アジアの言語と表象」、「東アジアの思想と構造」、「東アジアの歴史と動態」の3つの研究領域を設定し、これに則した科目編成をとっています。



東アジア文化研究科の3領域

新研究科の大学院生は、これら3領域のいずれかに自らの研究の基盤となる研究課題を設定し、そこから分野・地域の越境による展開を試みます。

東アジア文化研究科の専任教員は、陶徳民拠点リーダーをはじめ、サブリーダーの内田慶市・二階堂善弘・藤田高夫、事業推進担当の吾妻重二・松浦章の6名の教授に加え、文学研究科から中谷伸生教授を迎えて、7

名でのスタートとなりました（ある先生からは、「七人の侍」と評されました）。また開設初年度の本年4月には、前期課程15名、後期課程7名の新入学生を迎えました。そのうち留学生は半数の11名で、留学生が多数在籍する状況は、文学研究科時代と変わりません。従来からの在籍者を加えると、ICIS（文化交渉学教育研究拠点）に在籍する大学院生は、前期課程・後期課程合わせて56名となり、単独の専攻としてはきわめて大きなものとなりました。



2011年度新入生歓迎会

私たち関西大学が「文化交渉学」を提唱しはじめた時点では、この名称は必ずしも一般に認知されているものではありませんでした。しかしその後、韓国版COEともいべきHK（Humanity Korea）に採択された釜山の韓国海洋大学校には、文化交渉学の教育プログラムが設置されており、2011年4月には上智大学文学研究科に文化交渉学専攻が開設されました。それぞれ特色ある教育研究をめざしていますが、いずれも英文名称は'Cultural Interaction'であり、新たな学問分野としての文化交渉学の拡がりとして定着を予感させるものです。その中において、パイオニアとしての本拠点の役割は、今まで以上に重要なものとなっていくに違いありません。関係各位の一層のご理解とご協力をお願いいたします。





# 天草調査の経験から故郷を考える

王海（文化交渉学教育研究拠点・RA）

私と天草にどういふ縁があったのか。考えても不思議なことである。地元の出身でもないし、日本への留学といっても、天草という場所についてほとんど知らなかった。実際、調査班のなかで私と同じような感覚の留学生は多数おり、日本の地域史を専門とするリーダーの荒武助教でさえ天草の調査は今回が初めてという。言うならば我々は天草研究の素人集団だったわけなのだが、もっとも大切であるのは周縁プロジェクトの調査を成功させることだ。その成功とは、調査メンバーがそれぞれの「実り」を見つけ、それを報告書という「籠」に収め、今後の「種」として大切に育てていきたいという達成感及び責任感になるだろう。

私も天草の鎮道寺で司馬遼太郎が書いた色紙との偶然

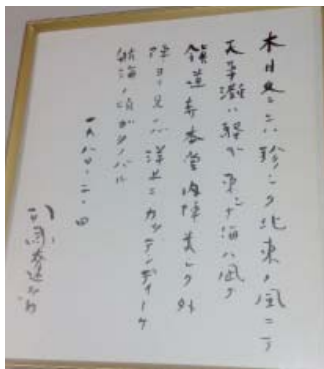


写真1

の出会いから、司馬遼太郎と天草の関係に関心を持ち、これについて報告を書かせていただいた。このなかで、司馬遼太郎の持つ天草に対する歴史観が地元の人々にどう評価されるのかを検討した。結論の一部として、司馬は天草の郷土史家から厚い信頼を受け、それ

を『街道をゆく 17 島原・天草の諸道』という「メモリープレゼント」で地元の人々に応えてみせたことを指摘した。まさにこのような互酬を通して、天草のことはより多くの人に注目され、天草の郷土研究も動かされていくのである。そして、私たち調査班も地域の人々の情熱に支えられる中、実りの多い調査・研究をすることができた。

今回の経験から私は自分の故郷のことを思い出した。私の故郷は中国四川省の樂山市という綺麗な町である。樂山大仏は世界一の規模とされ、毎日大勢の観光客で賑わっている。それとは対照的に、私が前に市の図書館を覗いたところ、郷土資料はごくわずかしかなく、薄っぺらなパンフレット、ガイドブック程度だったのである。さらに、政府関係者は地方誌編纂をやりたがらず、今は

80歳の老人だけにその仕事を任せているという。それらを今回ICISが作成した「天草関係文献リスト」と比較すると、雲泥の差があると言えるだろう。郷土研究への軽視、後継者の不足というのは、中国が直面している深刻な課題だと思えてならない。中国だけでなく、今回の調査は、教員、研究員を除けば、参加した大学院生は全員留学生であり、他の留学生の心にも大きなインパクトを与えたのではないだろうか。

今日、経済的なグローバル化が叫ばれる中で、文化的・地域的な研究は軽視される傾向が見られ、日本の郷土研究も同じような問題を抱えているだろう。だからこそ、地方文化を大事にするために、われわれ研究者たちは、社会からの支えによって、地元の人々とのインタラクションを深めなければいけない。<sup>(註)</sup>その意味で、今回の周縁プロジェクト調査は研究者と地方との連帯感を深め、われわれ留学生においても新たな使命感を与えられる、大変有意義な活動であった。天草と良縁を結びつけてくれた文化交渉学と天草の方々に非常に感謝している。

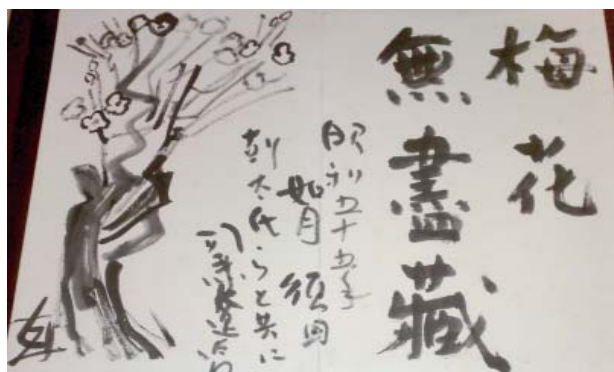


写真2

写真1・2：鎮道寺所蔵司馬遼太郎直筆色紙  
表紙上部写真：樂山大仏

注：歴史学者網野善彦は『古文書返却の旅』（中公新書、1999）において、一部の研究者は地方から集めてきた郷土資料を自分の私有物と見、地元の人たちの信頼を失わせることになり、それが郷土研究を窮地に立たせた原因だと指摘する。今回の調査は、地元人と信頼関係を築くのも一つの希望である。

## 国際シンポジウム

### 「道教研究の新側面—周縁からのアプローチ—」

日本道教学会第61回大会においては、関西大学文化交渉学教育研究拠点 (ICIS) と道教学会の共催により、「道教研究の新側面—周縁からのアプローチ—」と題した国際シンポジウムが2010年11月13日に開催された。

この国際シンポジウムでは、中国で発展した道教が、日本・朝鮮・ベトナムなどの地域に伝播し、そこで各地域の文化とどのように交渉して変容していったかを探った。また同時に、中国本土で途絶えてしまった一部の道教や民間信仰の文化が、かえって周縁地域に残り、各地に息づいている現状についても検討した。むろん、道教



会議の様子

の伝播という場合、華人が遠方地域に伝えているものも含まれるのが一般的であるが、今回のシンポジウムにおいては、漢民族以外の民族、或いは言語を異にする

地域への伝播をむしろ中心に据えて論ずることにした。国際シンポジウム「道教研究の新側面—周縁からのアプローチ—」のパネラー、及び司会・通訳は次の通りである（敬称略）。

司会 二階堂善弘 (ICIS・教授)

- ・「日本からの視点」  
増尾伸一郎 (成徳大学・教授)
- ・「韓国からの視点」  
鄭在書 (チョン・ジェソ 梨花女子大学校・教授)  
通訳・篠原啓方 (COE特別研究員)
- ・「ベトナムからの視点」  
大西和彦 (ベトナム宗教研究院・研究員)

国際シンポジウムは前半が研究発表で、14時30分より開始され、16時まで3名のパネラーによる発表が行われた。

まず増尾氏が「日本からの視点」について研究発表を行った。増尾氏の取り上げたテーマは、「『医心方』房内篇以前—道教の医方書と日本古代の漢詩文—」である。

丹波康頼の『医心方』は、数多くの失われた医学や房中術関連の書を含んでいる。そういった書物の影響が、藤原明衡作とされる『新猿楽記』、それに大江匡房作とされる『遊女記』に如実にあらわれている事実を指摘し、かつ道教系医書と日本の漢詩文の関係を鋭く論じた。

次に鄭在書氏が「韓国からの視点」として研究発表を行った。鄭氏のテーマは「韓国道教の固有性—中国道教

との対比的考察—」で、朝鮮の道教の受容について幅広く論じたものである。鄭氏は、朝鮮に伝わった道教には「官方道教」と「民間道教」の二つの大きな流れがあることを指摘し、三国時代・高麗期・李氏朝鮮期の各時期



趣旨説明を行う二階堂善弘教授

における官方道教の経緯と、李氏朝鮮期以後の民間道教の状況について、概括的ながらも要点をおさえた説明を行った。また「七星神」や「雷声普化天尊」などの、決して中国において信仰が隆盛とはいえない神々の信仰が、朝鮮で特に発展したという重要な指摘も行った。

さらに大西和彦氏が「ベトナムからの視点」について研究発表を行った。大西氏のテーマは「ベトナムの奏職文検『神霄玉格攻文』」であり、ベトナムの宗教職能者が使う奏職文検をもとに、道教と道士のあり方について論ずるものであった。大西氏はベトナムのタイクン（師供）の使う『神霄玉格攻文』が、中国で道士が使用する奏職文検と同類のものであることを指摘し、正一教の流れがベトナムにも存在していると実証的に検討を行った。

それぞれの研究発表を終えて16時から16時10分まで休憩となり、その間に質問用紙を集め、17時まで総合討論が行われた。討論の場では、質問のすべてを受け付けられないほどに、活発で内容の濃い議論が行われた。特に韓国とベトナムにおける道教の変遷と現代の宗教の状況に対する関心が高かったように思える。これは、これまで日本道教学会においてですら、韓国とベトナムにおける道教の状況がそれほど知られていなかったことを示すものであると考える。またベトナムのみならず、道教全体の奏職文検の性格についても質の高い議論が展開された。

道教が中国に発生した宗教であるのはもちろんのことであるが、それが周辺に伝播し、その後各民族や地域でどのように発展していったかについては、まだまだ検討すべき課題が多い。今回のシンポジウムでは、関西大学グローバルCOEで取り組んでいるテーマに沿った形で、より新しい視点を提供できたと思う。後の懇親会の場においても、活発な議論が個々に行われていた。

二階堂善弘 (ICIS・教授)



## 創生部会

## 第28回創生部会：2010年11月15日

「文化交渉学研究の実践とフィールドワーク論①—陶磁器の出土からみた文化交渉学」というテーマで中山圭氏（天草市教育委員会教育部文化課学芸員）、西野範子氏（NPO東南アジア埋蔵文化保護基金副代表）、橋口亘氏（南さつま市教育委員会坊津歴史資料センター輝津館学芸員）の3名による報告が行われた。

中山氏は「天草における交流—陶磁器を中心に—」に関して、出土陶磁器から中世天草における交流を分析すると同時に、陶石や石工から近世天草における長崎とのつながりについても考察を加えられた。西野氏は「14世紀から16世紀における九州出土のベトナム陶磁の分析とその意味づけ」という題名で報告された。本報告では、まず九州におけるベトナム陶磁の出土状況について述べ、次に14世紀後半から17世紀後半における各年代における流通とその背景について詳述することで、ベトナム陶磁の視点から、九州の貿易や流通について考察された。橋口氏は、「南九州の東南アジア陶磁の出土様相」について報告された。薩摩半島における発掘成果を総合的に分析し、中世から近世初期にかけて、多くの東南アジア陶磁が出土していること、そして中国大陸からの伝来を含めた貿易の緊密性を明らかにされた。とりわけ、日本三津のひとつとされる日本列島南部の玄関「坊津」の重要な役割が研究史上において位置づけられた。

## 第29回創生部会：2010年11月19日



楊大慶氏

楊大慶氏（ジョージワシントン大学・准教授）

史学史からみる東アジアの歴史対話

本発表では、二十世紀の歴史学、政治と歴史学の関連、国際歴史対話、東アジアにおける歴史対話という視点から、歴史家たちは国境を越える「解釈の共同体」を構築できるのかについて述べられた。

## 第30回創生部会：2010年12月10日

崔官氏（高麗大学校教授・日本研究センター所長）

東アジアにおける壬辰倭乱（文禄の役）の展開様相—日本を中心に—



崔官氏

江戸幕府は豊臣秀吉の朝鮮侵略との無関係を宣言し、朝鮮との国交を回復したため、文禄の役について記録を残そうとせず、関連作品を絶版に処すなどした。しかし、民間ではその戦乱について知ろうとする動きがあったため、記録化・文芸化が進んだ。本発表では、いまなお創作され続けているそうした文禄の役関連作品群には具体的にどのようなものがあるか紹介がなされ、時代により特徴が異なることが指摘された。また、文禄の役は日韓両国のあり方を考えるうえで原点となり生き続ける歴史として現在の意味を持っており、繰り返し解釈されざるをえないテーマであると締めくくられた。

## 第31回創生部会：2011年1月14日

韓東育氏（東北師範大学教授・歴史文化学院長）

「脱儒」から「脱亜」へ—近世近代日本思想史の一つの文脈



韓東育氏

本発表は、近代日本の「脱亜」思想の根源を再検討したものである。近世近代以来、日本の主流思想となった朱子学派は、古学派・国学派からの連続的な批判を受け、加えて近代日本における知的システムが西洋式へ更新されつつあったため、朱子学が再解釈され、西洋式の実学と朱子学の出会いは、「脱儒」の思潮となった。さらに朝貢システムの崩壊は、「脱儒」から「脱亜」への契機となった。

氷野善寛（COE-DAC）

## 「オランダ水」の謎 —近代中国における新聞とその読者—

池田 智恵（文化交渉学教育研究拠点・PD）

1917年7月14日、上海の三大新聞のひとつ『新聞報』に次のような記事が報道された。「国軍は12日午前5時半から9時まで天壇及び南池子に砲撃を行った。張勳軍は持ちこたえられず、武器を放棄して投降した。張勳はドイツ人の保護を受け、オランダ大使館に逃走した。」天津からの特別電報であった。これは、張勳が愛心覚羅溥儀を擁立して起こした王政復古のクーデター「張勳復辟」の失敗を意味するものであった。張勳復辟は、当時『新聞報』に限らず、各紙が大きく報じた事件である。

張勳復辟は失敗に終わったが、この報道は、実は新聞の読者たちの想像力に大きな波紋を投げかけた。

翌日15日、『新聞報』の文芸副刊『快活林』にある漫画が掲載された。文芸副刊とは、当時の総合紙によくあり、言わば文芸欄と言えるようなものである。各紙によってその内容や性格は異なったが、文芸副刊は多く読者の投稿から成り立っていた。『新聞報』の文芸副刊である『快活林』は、特にエンターテインメント系の文芸副刊として有名であり、多くの読者を獲得していた。

さて、件の漫画であるが、作者は、『快活林』によく政治風刺の漫画を描いていた漫画家の馬星馳である。それには、辮髪（べんぱつ）の人物が「荷嚙水」と書かれた瓶に入っている様子が描かれており、その横には、「張勳之安樂窩（張勳の安樂の住処）」という文字が見える。辮髪（べんぱつ）の人物は、辮髪（べんぱつ）を切らず、「辮帥（べんすい 辮髪将軍）」とも茶化された張勳復辟の張勳その人である。では、彼が入っている、「荷嚙水」の瓶とは何だろうか。「荷嚙」とは「荷蘭」、つまりオランダのことである。では、「荷嚙水」とは？文字通り訳せば「オランダ水」となるが、これは、当時の炭酸水の呼び名であり、夏の暑さを癒す飲み物として知られていた。張勳が「オランダ水（炭酸水）」の瓶の中つまり、これは彼がオランダ大使館へ逃げ込んだことを揶揄したものなのであった。

さらに、この漫画の反響は大きかった。9月9日には、『快活林』の「諧著」という遊戯文のコーナーに楓隱という人物が書いた「荷嚙水冤状（オランダ水が無実を訴える書）」が掲載された。これは「オランダ水（炭酸水）」が、自分は、夏の暑さを癒すものであって、世の中の人々

のためになればこそ、悪いことをしてきた覚えは何もないのに、張勳が自分の中に入ったために迷惑を被ったと訴えるものだ。その後もこの漫画をたねにした多くの遊戯文が『快活林』、もしくは他の新聞の文芸副刊にも掲載されており、「オランダ水」と言えば、この張勳復辟を指すといっても過言ではない程になってしまった。

このように、時事ニュースまたはゴシップをもとに、読者が遊戯文を書いて投稿するというのは当時珍しいことではなく、『新聞報』に限らず多くの新聞の文芸副刊などで目にすることができる。この「オランダ水」をめぐる一連の投稿はその中でも非常に評判になったものの一つにすぎない。

ここで注意したいのは、これは新聞というメディアによって成立し得たものでもあることだ。新聞は当時の中国にとってまだ新しかった。その新しいメディアを読者が毎日読む、そしてその新聞には文芸副刊という読者にとって開かれた空間があった。筆に自信のある読者たちは、新聞を読んでは、遊戯文を投稿し、またその遊戯文を読んだ他の読者が新たに投稿を行う。この投稿をめぐる創造は、新しい想像力と言えるものであり、この連鎖反応が、やがては、さらに大きな新たな文化事象の発生へとつながっていったのではないかと考えている。

近代中国が新聞に出会った時に生まれたうねり—それは文化交渉の産物とも言えるだろう。人々が新たな文化に出会う時、それは新たな現象が生まれる瞬間である。



1917年7月15日『新聞報』文芸副刊『快活林』より(馬星馳作)





## 第7回

# 南北分断とカムジャタン

篠原 啓方 (文化交渉学教育研究拠点・特別研究員)

中華料理ほどではないが、韓国料理もずいぶんと日本で知られるようになった。だがその地域性についてはまだよく知られていないように思う。例えば、かつては南部で食べる習慣のなかった料理。よくいわれるのがネンミョン(冷麺)やマンドゥ(韓国風餃子)で、これらは半島北部、つまり北朝鮮地域の伝統食である。



写真1

カムジャタンもその一つだ。タンは湯(スープ)の意で、一言でいえば豚肉がメインの辛味スープである。浅底の広い鍋にダシ汁を入れ、豚の背骨、じゃがいも、すいとん、春雨、餅(トック)



写真2

なったら食べる(写真1・2)。

名前の由来だが、韓国語ではじゃがいもをカムジャと言うから「じゃがいも入り辛味スープ」と思われがちだ。だが実はカムジャとは豚の背骨を指す言葉でもある。料理名としてはこちらが本命というわけだ(写真3)。



写真3

起源はよく分からない。今回訪れたソウル敦岩洞にある1958年創業の専門店(ちなみにこの店ではカムジャックと呼ぶ)によると、満州で朝鮮族が始めたのだという。韓国では中国北東部を満州と呼ぶ人が多いので、いわゆる満州国時代を指すのかどうか、はっきりしない。そして朝鮮戦争の際、戦乱を避けて北から逃げてきた人がソウルの鍾路で始めたのだという。カムジャタンは酒の肴として食されることが多く、具材はどれもほぼ同じだが、この店ではラーメンがトッピングとして出てきた(写真4)。

シメは、鍋で炒めた海苔とキムチ入りのご飯(写真5)。とにかく鍋が空になるまで食べ続けるわけで、いかようにみつくるっても高級料理にはほど遠い。もとより残り物の肉を使った大衆B級グルメだったのであろう。



写真4

1950年に朝鮮戦争が勃発すると、多くの人々が南から北へ、北から南へと身を避けた。半島は韓国と北朝鮮という二つの国に分断され、多くの



写真5

家族や恋人が引き裂かれるという悲劇を生んだ。故郷に帰れない人々が生きるために始めた北部の料理は、いまや韓国を代表する人気料理となった。「悲劇が生んだ食の文化交渉」というと大げさかもしれないが、食文化の背景にある人々の移動と喜怒哀楽に、しばし想いを馳せた。

ちなみに韓国では食事の際、必ずといってよいほど汁物がつき、箸と匙がセットで並ぶ。韓国では、最初に料理に手をつける際、匙でスープを飲む光景をよく目にした。僕もずいぶん長く韓国にいたが、この習慣は身につかなかった。というよりも、わざと箸を取り、ご飯から手をつけていた気がする。今にして思えば、無意識に日本人というアイデンティティを確認していたのかもしれない。だが日本に帰国して1年ほど経ったある日、ソウルの食堂で、最初に匙でスープに手をつけたことに気づいた。自分と韓国をつなぎとめたいという想いからだろうか。人間の心理とは、かくも不思議なものである。

写真1・2：鍋到着まで5分。煮はじめて10分。食べ頃いまだ来ず。

写真3：中国語訳の「土豆湯(ジャガイモスープ)」。そうじゃないのだ。

写真4：ラーメンは袋内で割ってから。

写真5：最後はスープを少量残して炒めご飯に。

## ❖ 講演会

\*COE客員教授講演会：2010年11月10日・鄭培凱(関西大学COE客員教授/香港城市大学教授)「茶道與中國文化情懷」

## ❖ 受賞報告

\*COE-PDの岡本弘道氏の著書『琉球王国海上交渉史研究』(榕樹書林・2010年3月)が第38回(2010年度)伊波普猷賞を受賞した。同賞は、沖縄学の父・伊波普猷の業績を顕彰し、郷土の文化振興と学術の発展に寄与すると認められる研究、著作に贈られるものである。

## ❖ 出版物紹介

- \*松浦章/著  
『近世東アジア海域の文化交渉』  
(思文閣出版・2010年11月・448頁)
- \*松浦章/編著
  - ・『明清以来東亜海域交流史』  
関西大学東亜海域交流史 研究叢刊《第一輯》  
(台北：博揚文化事業有限公司・2010年12月・355頁)
  - ・『近代東亜海域交流史』  
関西大学東亜海域交流史研究 叢刊《第二輯》  
(台北：博揚文化事業有限公司・2011年2月・402頁)
  - ・『文化十二年豆州漂着南京永茂船資料  
—江戸時代漂着 唐船資料集九—』  
関西大学東西学術研究所資料集刊十三—九  
(関西大学東西学術研究所・2011年2月・385頁)
- \*関西大学中国語教材研究会(代表：沈国威)/編  
『中日同形語小辞典〔甲〕』  
(白帝社・2011年2月・194頁)
- \*沈国威/編  
『近代英華英辞典解題』  
関西大学東西学術研究所資料 集刊31  
(関西大学東西学術研究所・2011年3月・248頁)
- \*西村昌也/著  
『ベトナムの考古・古代学』  
(同成社・2011年3月・360頁)
- \*原田正俊/編  
『天龍寺文書の研究』  
(思文閣出版・2011年3月・720頁)
- \*Society for Cultural Interaction in East Asia  
*Journal of Cultural Interaction in East Asia Vol.2*  
(Society for Cultural Interaction in East Asia, March 2011, 108p.)
- \*関西大学文化交渉学教育研究拠点(リーダー：陶徳民)/編  
『東アジア文化交渉研究』第4号  
(関西大学文化交渉学教育研究拠点・2011年3月・593頁)
- \*関西大学文化交渉学教育研究拠点/編  
『東アジア文化交渉研究』別冊7  
「言語の接触と変容—中国語の近代的变化と外国語—」  
(関西大学文化交渉学教育研究拠点・2011年3月・203頁)
- \*西村昌也/編  
『東アジアの茶飲文化と茶業』関西大学文化交渉学教育  
研究拠点 周縁の文化交渉学シリーズ1  
(関西大学文化交渉学教育研究拠点・2011年3月・234頁)
- \*荒武賢一朗・野間晴雄・藪田貫/編  
『天草諸島の文化交渉学研究』関西大学文化交渉学教育  
研究拠点 周縁の文化交渉学シリーズ2  
(関西大学文化交渉学教育研究拠点・2011年3月・220頁)
- \*荒武賢一朗・池田智恵/編著  
『文化交渉における画期と創造』関西大学文化交渉学教育  
研究拠点 次世代国際学術フォーラムシリーズ 第3輯  
(関西大学文化交渉学教育研究拠点・2011年3月・303頁)

## ❖ 人事異動

- \*2011年1月31日を以て、久保江梨香氏がCOE-JAを離任した。
- \*2011年3月22日を以て、奚伶氏、林靖恵氏がCOE-JAを離任した。
- \*2011年3月31日を以て、西村昌也氏がCOE助教、井上充幸氏がCOE特別研究員を離任した。
- \*2011年3月31日を以て、岡本弘道氏がCOE-PD、熊野弘子氏、Nguyen Thi Ha Thanh氏、松井真希子氏、鄭英實氏がCOE-RAを離任した。
- \*2011年4月1日を以て、宮嶋純子氏がCOE-PD、橋本千明氏がCOE-JAに着任した。
- \*2011年4月15日を以て、佐藤トウイウエン氏、岑玲氏、高橋沙希氏、中山創太氏がCOE-RAに、市村茉莉氏、亀井拓氏、榎木亨氏、川端千恵氏、辻井瑛美氏、楊君儀氏がCOE-JAに着任した。
- \*2011年4月20日を以て、孫知慧氏、張麗山氏がCOE-RAに、岩城美佳氏、宋儀氏、丁世絃氏、田琛氏、楊燁沁氏がCOE-JAに着任した。
- \*2011年4月25日を以て、鄭虹氏、范俏蓮氏がCOE-JAに着任した。



グローバルCOEプログラム  
「関西大学文化交渉学教育研究拠点」(ICIS)  
紀要原稿募集のお知らせ

関西大学文化交渉学教育研究拠点では、紀要『東アジア文化交渉研究』(Journal of Cultural Interaction Studies in East Asia)の原稿を、下記の要領で募集しております。応募いただいた原稿は、編集委員の査読により、掲載の可否を決定いたします。

(1) 原稿

東アジアの文化交渉にかかわる論考、研究ノート、その他

(2) 使用言語

日本語：20,000字程度

中国語：20,000字程度

英語：4,000語程度

(3) 注意事項

(a) 英語による要旨を、150語程度で添付してください。

(b) 提出はワード文書でお願いいたします。

(c) 注は脚注方式でお願いいたします。

(d) 文献についても参照文献リストは付けず、脚注に収めてください。

(e) 図表がある場合にも、なるべく上記字数に収めてください。

(4) 投稿原稿の二次利用としての電子化・公開につきましては、紀要掲載時点で執筆者が本拠点到に承諾したものといたします。

(5) 提出締切り等、詳しくは下記の連絡先にお問い合わせください。(第5号のメ切りは10月20日です。)

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

関西大学文化交渉学教育研究拠点

『東アジア文化交渉研究』編集委員会

TEL : 06-6368-0256

E-Mail : icis@ml.kandai.jp

## 編集後記

日常生活とはいかに尊いものか、と多くの人々が感じた春だったのではないだろうか。春とは呼びがたい、寒い、奇妙な時期だったが。地震から数日、テレビに釘付けになっていた頃、イタリアでバカンスを過ごす友人からメールが入った。東京で留学しているキューバの友人が、地震と原発の問題で怖くなってしまい、大阪に向かったのだが、日本語があまり話せないで、心配だから連絡してくれないかというのだ。早速、連絡をとった。すると、彼は、大阪に来たもののホテルが見つからないので東京に帰ったという。私は他言語に対応した情報を彼に送り、彼はなんとか平静を取り戻した。私の把握する限り、これは珍しいことではない。ヨーロッパ系の友人などは、逃げるように母国へ戻ってしまった人もいた。おそらく外国でのあまりにもセンセーショナルな報道の影響だろうが、今回の地震で日本在住の外国人の基盤がいかに脆いかが見えたような気がした。日本に住む外国人は多い、ただ何か起きたときに彼らをバックアップできるシステムが構築されているとは言い難いのだ。文化交渉が日々起きる世界で、そこに住む人々の日常を守るにはいったい何が必要なのだろうか。

(担当 池田智恵)

## 表紙写真について

ベトナムのフエに、例年より早く雨期がきた。2009年9月4日の朝に迎えた突然の大雨大洪水に、調査団は緊張した。ホテルを発ったバスが増水で進めなくなったため、ズボンの裾をまくって目的地まで歩くことにした。道路に入りこんだ水はすでに膝まで達し、隣接するフォン(香)江と水位を同じくしている。その距離およそ30メートル。この一帯は、普段から地表面と水面の高低差が1~2メートルほどしかなく、フォン江では舟が急流に吞まれてせわしく回転している。

「雨期はこんなものですよ」。通訳のヴァンさんは平然と言った。雨期には市内の多くの家が浸水を経験するという。だがその口ぶりは、災害というよりも年に一度の大掃除、という感じであった。写真は商区バオヴィン(褒栄)のある家屋だが、隣のディアリン(地霊)では数メートル手前まで水が押し寄せ、村の祠で、大人子供が年に一度の祭祀に勤しんでいた。その北隣のミンフォン(明香)はかつて中国系移民の貿易港だった集落であり、都城をめぐる水路には多くの水上居住者が暮らしている。水はフエの人々にとって、畏怖や支配の対象ではなく、まさに共生のパートナーであった。子供たちの笑顔が、それを象徴しているように思えた。



[撮影：篠原啓方]



# Reflection 8

ICIS Newsletter, Kansai University

発行日.. 2011年(平成23年)7月31日  
発行.. 関西大学文化交渉学教育研究拠点

大阪府吹田市山手町3-3-35

〒564-8680 TEL06-6368-0266

E-Mail [icis@mlkandai.jp](mailto:icis@mlkandai.jp) URL <http://www.icis.kansai-u.ac.jp/>

関西大学文化交渉学教育研究拠点

# ICIS

